

対馬産ルイスコメツキモドキの生態的知見

境 良朗

ルイスコメツキモドキ *Languriomorpha lewisii* (Crotch, 1873) の寄主植物は自然状態ではナチシダ *Pteris wallichiana* が知られているが (笹岡, 2009)、栽培ワラビを加害している事例も報告されている (大友, 2014)。本種が対馬に産することは、松尾・原 (2015) によって初めて記録された。既産地は美津島町白岳、厳原町権現山、厳原町久田である。久田ではオシダ科イノデ属イノデ *Polystichum polyblepharon* から成虫が4頭得られているが、その後の調査では幼虫は発見できなかったようである。今回新たにイノモトソウ科イノモトソウ属のオオバイノモトソウ *Pteris cretica* (写真1) から多数の個体を得ることができたので報告する。

主な記録をあげる。

- ・1ex., 長崎県対馬市厳原町内山, 9. IV. 2018 (越冬個体初見)
- ・数頭. (写真2), 長崎県対馬市厳原町日見, 5. V. 2017
- ・多数. (写真3), 長崎県対馬市厳原町内山, 18. X. 2016 (新成虫)



写真1. オオバイノモトソウ



写真2. 葉柄のルイスコメツキモドキ



写真3. 葉を噛むルイスコメツキモドキ

その他、美津島町加志、上県町山田山など島内各地でかなりの確率でオオバイノモトソウから見いだすことができた。

4 月上旬には既に越冬明けと思われる個体を見ていること、以後秋まで幼生期を除いてオオバイノモトソウから得られることなどから、一時的な後食植物ということではなく依存度はかなり高いといえる。オオバイノモトソウが前述のナチシダと同属であることも興味深い。越冬態は恐らく成虫越冬と思われ、オオバイノモトソウから遠く離れることなく行われていると予想している。今後は寄主植物の可能性を念頭に、幼虫・蛹および越冬個体の発見に努めたい。ただ、オオバイノモトソウの葉柄部は幼虫が穿孔するにはあまりにも細すぎるのか、その形跡が全く見られないので、地下の茎部を確認する必要があると考えている。

参考までに対馬産の交尾器を示しておきたい。



写真 4. ♂交尾器中央片

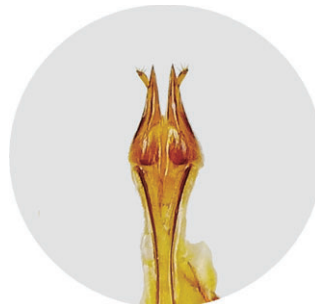


写真 5. ♀交尾器

♂中央片の側面は三日月状に湾曲し、先端に向かって細くなる（写真 4）。延びているのは射精管と中片尾である。♀の産卵管の先端はキチン化した一對の鋭い棘状突起に分かれ、それぞれの外側には数本の感覚毛を有する小桿状突起を備えている（写真 5）。

なお、オオバイノモトソウからはケシコメツキモドキ *Microlanguria jansoni* も得られたことがあるので付記しておく。（lex., 2016 年 10 月 17 日，厳原町内山）

末筆ながら、食餌植物について多くのご教示を頂いた故國分英俊氏、コメツキモドキ科の交尾器について貴重な文献を恵与頂いた松尾照男氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

松尾 進・原 有助，2015. 対馬・壱岐のコメツキモドキのチェックリスト. Elytra5(1) : 123-128

笹岡康則，2009. ルイスコメツキモドキの食草. タテハモドキ. 45 : 23

大友令史，2014. 岩手県の栽培ワラビにおけるルイスコメツキモドキの発生. 北日本病虫研報

65 : 167-169

三輪勇四郎・中條道夫，1937. FAUNA NIPPONICA Vol. x Fas.VIII No.VIII 擬叩頭蟲科